

結婚

橋田壽賀子



結婚

橋田壽賀子

結 婚

定価九八〇円

昭和五十七年三月二十七日 第一刷発行

著者 橋田壽賀子

発行者 石川晴彦

発行所 株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一―六 郵便番号一〇一
振替 東京二―一八〇番 電話(〇三)二九四―二二一

印刷所 凸版印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良の品がありましたら、おとりかえします。
お近くの書店か、本社へお申しいでください。

© Sugako Hashida 1982 Printed in Japan 0093-915350-3062

目次・結婚・

第一章 くやしい結婚式 2

第二章 揺れる娘心 37

第三章 末娘の結婚 72

第四章 実らぬ恋 122

第五章 家族の重さ 156

第六章 それぞれの道 188

第一章　くやしい結婚式

(一)

部長の中原一平から、人事部長がよんでいると言われたとき、花田秋子は一瞬いやな気持ちにとらわれた。

食料品の輸出入をあつかう、中堅商社の東陽商事に勤めて十九年になるが、これまで人事部長によばれたことなどなかった。高校を卒業と同時に入社して以来、秋子は一貫して缶詰類をあつかう第一営業部の庶務を担当してきたのである。今の仕事を特に望んだわけではないが、これといった特技や才能もない高校卒の女子社員には、そんな仕事しか与えられない。

昇進や人事異動とはまったく縁がなく、この会社にいる限り、第一営業部の庶務以外の仕事につくこ

となど考えてもいなかった。

長年、庶務の仕事をしてきただけに、数字にはこまかく、部員の出張経費などについても、適当に処理することはしない。この日も、部員の野々村が出張先での打ち合わせ費用を領収書なしで請求してきたのに対し、規則だからお金は出せない、受けつけなかった。

「領収書をなくしてしまっただよ。初めての町だし、店の名前もよく覚えていない。なんとかうまくやってよ。君の判がありや部長だって文句言わないよ、君、信用あるんだから」

野々村はそう言っておがむように手をあわせたが、

「規則は規則ですから」

と秋子はつっぱねてしまった。

「君が金を出すわけじゃあるまいし……。僕はね、社のために九州まで行ってちゃんと大口の受注の契約をしてきてるんだ。二万や三万の交際費にガタガタ言われることはないよ」

野々村は、なおもくいきがったが、秋子はききいれなかった。性格的に適当なところで帳じりを合わせるができないのである。

そんな秋子を、かたいとか、融通^{ゆうづう}がきかない、あんなだから嫁のもらい手がないのだ……とか、さまざまに陰口をたたくものがある。秋子自身、自分が少しかたすぎると思うこともあるのだが、今更みんなにあわせて柔らかくしてもはじまらないと思っている。

神妙な顔で人事部の部屋に行くと、人事部長の平田が目ざとくみつめて、愛想笑いを浮かべた。秋子は、警戒する姿勢になった。

「よびつけてすまなかったね。他でもないんだが」

平田は笑みを崩さないまま言葉を切り、秋子をみつめた。次にどんな言葉がもれ出てくるか、秋子は不安だった。

「花田君も営業の庶務、そろそろ二十年だよね」

「はい」

「よく辛抱したねえ。なにもかものみこんでくれるから、営業も君をとられるのは困らしいんだが」

「……？」

「資料室も年々資料が増えてきてねえ。どうしても一人ほしって言ってきてるもんだから」

「……」

「正式な異動の発令は来月になるんだが、残務整理や引き継ぎもあるだろうから、一応そのつもりでいてもらいたいと思ってね」

「はい」

と答えたものの、秋子の頬はひきつっていた。

「このへんで新しいところへ行くのも、気が変っていいだろう。よろしく頼むよ」

秋子の衝撃を知ってか知らずか、平田人事部長は快活に言って、笑いを浮かべている。

資料室は、営業の庶務にくらべて仕事が楽と言われても、秋子の気持は晴れてゆかなかった。典型的な「窓際族」のたまり場で、無気力ムードが支配している……というのが、資料室についての社内の噂だった。秋子は、なんだか自分が社内で無用な人間と宣告されたような気がした。

この日はたまたま、同じ課の沢井タカ子の結婚披露宴が夕方行なわれることになっており、部員たちは、仕事の合間にその噂をしていた。

「いつまでもいてほしいと思う娘は、さっと売れちまうし、いやなのばかりが居すわっている」

秋子にきこえよがしに言う男子部員の目をさけるようにして、秋子は廊下へ出た。

秋子も夕方からの披露宴によばれていた。気がすすまなかったが、この上、欠席でもしたら、更に何を言われるかわかりはしない。

上司の中原一平が、気落ちした様子の秋子に声をかけ、喫茶店にさそってくれたのは、せめてもの救いだった。今でこそ一平が上司だが、入社したのは秋子のほうが数年早いのである。

そのためか、日頃から一平は、なにかと秋子に気をつかってくれていた。

「資料の整理保管だって、社にとっちゃあ大事な仕事だ」

コーヒーを一口すすするなり一平は言った。

「ことに女性にはむいている。君のような几帳面なひとには、適任だ」

「一平さんに慰めてもらうなんて」

「……」

「私、ちゃんとわきまえてます。資料室は姥捨山よ。あそこへやられたら、そろそろ辞めなさいって言われたのと同じ」

秋子の顔に思わず自嘲の笑いが浮いてしまった。

「そりゃあ偏見だよ。どんなポストだって、その気になればそれなりのやり甲斐はあるはずだ。君なら立派にこなせるはずだ」

「ええ、やるより他ないわね」

秋子は、そう答えるより他なかった。このまま会社に居続けても出世する見込みはないし、できるなら辞めたい……と秋子はこれまでも何度か思った。しかし、自分の給料が花田家を支える大きな柱の一つだと思うと、自分をおさえるしかないのだった。不満だといって、辞めて他に適当な勤め口があるわけでもない。

「よかったのよ」と秋子は、あえて強がりを言うように言った。「私が営業にいたら、一平さんだってやりにくいわ。一平さんとは営業にずっと一緒にいて、なれすぎたし、口さがないこと言う連中もいる

しね」

「僕はそんなこと……」

「そういうこと気にしなきゃあ、組織の中じゃ生き残れやしないわよ。私は大丈夫。女なんてどうせ出世できないんだし、そんな野心もないし……。どこへ行ったって、お給料が変わるわけじゃなし」

「……………」

「会社も気の毒よね。営業の庶務なんて、伝票の整理と計算ができりゃあいいんだもの。高校出たばかりの女の子で充分なのに、勤続二十年近い高給取りに居すわられて、邪魔になっても、辞めろとは言えないし……。せいぜい配置がえするくらいで我慢して、飼いきれにしないから」

沢井タカ子の結婚披露宴は、会社からほど遠くない所にあるホテルで行なわれた。

新郎はタカ子より三つほど上の二十四歳と紹介された。新郎新婦とも、若さが匂いただよってくるようだった。新婦側の招待客には、秋子も含めて東陽商事の社員が多い。その一人、たまたま秋子の隣りに坐った、資料室勤務の笠井則子が、すでに秋子の異動を知っているようで、話しかけてきた。

「仕事らしい仕事なんてないわよ、資料室は……。これからは退屈とのたたかい。それに耐えられなかったら、辞めろってこと」

「……………」

「馬鹿にしてるわよね。私なんて高校卒の入社でしょう、入ってから二十年もお茶くみに毛のはえたような仕事しかさせてもらえないでさ、今更役に立たないもんだわ。私たちだって、それ相応のポスト与えてくれたら、男に負けない仕事する自信くらいあるわよ。それを女だからって何もさせないでいて、能力がないものは辞めろと言わんばかりにさ。一度くらいチャンスを与えてみろって言うのよ。そのへんの男よりはよっぽどいい仕事してみせるわよ。したくてもできないような差別しといて、無駄飯食ってるみたいな評価されちゃあ、泣くにも泣けないわ」

「……」

「くやしいから、私、徹底的に居すわってやるの。花田さんもくさっちゃ駄目よ。私ね、定年まで女子社員の差別撤廃のため闘うつもりよ。それが、私の仕事だと思ってるの。あんただって同じ気持ちでしょ。お互いに独身で会社で青春をささげてきたんじゃないの」

則子はそんなふうにかくしたて、秋子に手をさしだし、

「一緒に立ち上ろうよ」

と言った。しかし、秋子には、そんな気持はなかった。則子と二人で差別撤廃に立ち上ったところで、無視され、嘲笑されるにきまっている。他の男子社員が秋子たち比較的高齢の女子社員をけむたく思っていることは、タカ子の会社の上司として挨拶に立った野々村の結婚スピーチにもはっきりとあらわれていた。彼は、新婦のタカ子に向って大仰な身振りをまじえて言うのだった。

「おめでどう……と言わなきゃならないんですが、僕は、ただただ新郎が羨ましくて、憎らしくて、せつかくの御馳走も喉を通らない思いであります。この無念さは、我が第一営業部全員の思いでもあります。二十一歳、花ならまさに開かんとする初々^{うづう}しさは、我々が職場の太陽でありました。その太陽を失うことは淋しい限りであります、可愛くて優しいからこそ、売れてしまうのでありまして、早く嫁に行ってくれないかと思われるようになっては、女性もおしまいであります。それが、世の中うまくいかないものでして、いつまでもいてほしいと思うような娘に限って、さっさと結婚してしまい、早く……と思うのは、これまた、いつまでたっても売れず、年ごとに甲羅を増しまして、ますます縁遠くなり、ますます可愛気がなくなってきました」

さすがに秋子も、腹がたったが、いちいち怒ってもはじまらない。さりげなく受け流して、平静を装う。それが長年の勤めで身につけた、秋子なりの処世でもあった。

披露宴がとどこおりなく終わったところで、部員の何人かが二次会に行こうと秋子をさそった。気のり薄な表情を浮かべると、社員の誰かが、

「花田女史は、我々の相手をしている暇はないんだよ。彼氏のために夕飯の支度もしなきゃならないし」

などと言った。実際、秋子はこれまで会社が終ると真直ぐ帰宅し、同僚たちとのつきあいなどほとんどしたことがなかった。スラリとした恰好の現代的な美人であるし、同僚たちは、そんな秋子に当然、

男友達や恋人がいると思ひこんでいたようだ。それだけに、秋子が、

「いいわ、おつきあいしましょう。パツとやりますか、今夜は」

と言ったので、みんなは目を見張った。

「よおし、千載一遇の好機だ。花田女史を酔わせて、神秘のベールを脱がしちゃう」

「俺もききたい、その美貌でなぜ結婚しないのか。彼氏はあるけど、結婚できないのか。それとも結婚できないような肉体的な欠陥でもあるのか」

そんなことを陽気に言いながら、部員らは秋子を六本木のスナックにひっぱっていった。部長の中原一平も一緒ということで、秋子は気が大きくなっていた。

(二)

世田谷にある花田家では、母のハナをはじめとして、次女の冬子、三女の夏子、四女の春子が、秋子の帰りを待ちわびていた。

母一人と娘四人の、女世帯である。一応一戸建ての二階家だが、建ってからかなり日がたっており、つぎはぎ細工のように、方々に修理のあとが残っている。ただ台所だけは、古い造作に似合わず、モダンに整えられており、居間もそれに合わせて、つい最近手を入れたようだ。

テーブルにはすでに鍋料理の支度ができていたが、まだ誰も箸をつけていなかった。とにかく秋子が帰ってきてから……というのが、料理を作った次女の冬子の意見だった。

「ああ、もう我慢できない。死んじゃう、食べちゃおうよ」

三女の夏子が、たまたらずにかん高い声を出した。冬子が制したが、

「もう八時よ。とつくに帰ってきてもいいはずでしょ」

と夏子は、頬をふくらませて言う。今夜、秋子が会社の人の結婚式に出席する……とは、冬子もきいていた。しかし、終るのは七時だというし、そのまま帰れば、とつくに家に着いている時間である。これまでの習慣から、秋子が連絡もしないで寄り道をしてくるなど、誰ひとり思ってもいないのだった。

「結婚式なら御馳走食べてくるんでは。お夕飯待つことないじゃない」

夏子がなおも不満氣に言った。

「どんな披露宴かわからないじゃない。立食のパーティなら食べられないし」

冬子が、あくまで秋子のことを気づかうと、

「春子だって可哀想よ。お夕飯すまきなきゃあ、勉強もできやしない。大学受験目前にひかえているのよ」

と夏子が反論し、姉妹喧嘩になってしまった。花田家では、次女の冬子が家事の一切をきりまわし、三女の夏子は私立の医大生、そして四女の春子が、大学受験をひかえた高校生だった。こうした一家の

家計を支えているのが、秋子と、役所勤めをしている母のハナであった。

ハナは別格として、特に秋子の肩には一家の家計が重くのしかかっているため、冬子としては、かなり気をつかっているのである。

秋子がこれまで、同僚とのつきあひも遊びもせず、会社と家の間を往復する生活を続けてきたのも、花田家で自分の役割を強く意識しているからだった。

「秋姉さん、恋人でもできたのかな」

末の娘の春子が、ふとつぶやくように言ったので、母のハナと冬子が、びくつとして春子を見た。

「秋姉さんが家のこと忘れちゃうなんてき、よっぽどのことだもん」

春子のそんな言葉を押し戻すように冬子は言った。

「へんなこと言わないの、子供のくせに。そんなひとがいたら、すぐわかるわよ。毎日顔つきあわせてるんだから」

「まいったなあ、冬姉さんの自信には……」

「家族の気持がわからないようじゃあ、この家あずかっている資格はないの。春ちゃんのことだって心配してるのよ。このごろお弁当残してくるでしょ。うちでだってあんまり食べないし」

春子の食欲不振については、医者のお卵の夏子は、ストレスだと断定している。受験が迫ってくると誰でもなるものだというのだが、冬子には、なんとなくそれだけではないようにも思えた。

が、今は、とにかく秋子の帰りの遅いのが心配だった。やがて、九時十時と時間が経過しても、秋子からは何の連絡もない。それまで、比較的鷹揚にかまえていたハナも、落ち着かず、時計ばかり見ていた。

結局、秋子が帰ったのは十二時をまわっていた。泥酔し、一人では立つて歩けないほどだった。一緒に飲んでいた中原一平がタクシーで送ってきたのである。一平は、花田家の人たちに、遅くなったことを恐縮そうにわびたが、秋子はそれのまわらない口調で、母や妹たちを一平に紹介し、更に酒を飲みなおそうと言いはじめた。

二次会で会社の同僚とスナックに行き、ブランデーを相当飲んだらしかった。ディスコダンスのできる店だった。胸の底によどんでいたものを洗い流すようにブランデーを飲んで身体を激しく動かしたりした結果、したたかに酔ってしまったのである。

もともとお酒など飲まないひとと思っていただけに、花田家の人たちは、驚いた。とりあえず、秋子とともに一平を家にあげた。

日頃の秋子からは想像もできないことであつたが、

「一平さんにお味噌汁つくってあげる」

などと言って、よろよろ立ち上って台所に行こうとする。冬子が慌ててとめると、

「ほつといてよ。一平さんは私のお客さんなんだから。私が食べさせてあげるの」

秋子は、冬子の手をはねのけて、冷蔵庫のドアを開ける。それをとめようとする冬子との間に押し問答があつたりして、花田家は、時ならぬ騒ぎになつてしまった。

一平は恐縮し、すぐ帰ると言いしたが、秋子は酔眼を歪めながら、

「駄目。今夜は帰さない。母さん、なにぼんやりしてるの、お酒」

と高い声をあげる。仕方なしに、ハナは冬子にウイスキーを出させた。秋子は、冬子たちがとめるのもきかずに、水割りウイスキーをビールを飲むように口にふくみ、

「今夜は最高だなあ」

などと言うのだった。ハナたちは、そんな秋子に、ひどくいたいたしいものを感じてしまい、力づくでとめることもできなかった。

「一平さん、飲んでますかあ」となおも秋子は、ろれつのまわらない口調で言う。「私ね、一平さんにきいてもらいたいことが山ほどあるの。一平さんは、十五年も私の仕事みてきてくれた。一平さんだけよ、私のつらい氣持わかってくれるの。ね、今夜はつきあってね」

一平は当惑顔であつたが、秋子が配置転換と年下の女子社員の結婚で二重の打撃をうけていることを知っているだけに、秋子の氣のすむようにさせておく他はなかった。

間もなく、秋子はその場にぐずおれるようにして眠ってしまった。医大生の夏子や春子が介抱して、